

「主にある平和」

2022 年 8 月 24 日尚綱学院中学高等学校
石巻栄光教会 川上直哉

YMCAでは、長く「平和」の活動が行われています。「仙台平和七夕」です。「ヒロシマ・ナガサキ」を覚え、核兵器の悲惨を忘れず、平和を求めようという運動です。大きな運動となり、尚綱学院を含む仙台のキリスト教学校も協力して、この活動は、もう40年も続いています。

昨年から、この「平和七夕」が石巻でも行われるようになりました。YMCA石巻センターが石巻栄光教会の敷地内にあるものですから、私も少し、お手伝いをしています。二年目になる今年は、少しまた規模が大きくなり、そしてもう少し、平和について深く考える機会を得ました。

今年はウクライナで戦争がありました。ウクライナの大統領は「女性も子どもも武器を取って戦え！」と号令をかけていました。ロシアが悪いのだから「当然」なのだそうです。

また最近、中国では「アメリカ軍にミサイルを撃ち込め」という強い願いが、ネット上に溢れたそうです。アメリカが悪いのだから「当然」なのだそうです。

世界には、二つの「平和」があるようです。

一つは「戦争と戦争の間の休憩」としての平和です。それは「次の戦争のための準備期間」としての平和です。

そして、それとはまったく別の「平和」があります。それは「戦争がなくなる状態」です。「次の戦争を考えなくてもよい状態」としての平和です。

「次の戦争の準備期間」としての平和には、一つの批判が向けられます。それは「いつまでも殺し合いの準備を続けるのか」という批判です。果てしない軍備拡張が「平和」の間、ひたすら行われる。愚かなことだ。そんなことをしていたら、いつか、人類は全滅してしまうぞ。——そういう批判です。

「次の戦争を考えなくてもよい状態」という平和には、やっぱり、また別の批判が向けられます。それは「平和ボケ」という悪口と共に語られるものです。「人間には譲ってはいけないものがある。奴隷になるくらいなら、武器を取って戦うべきだ。滅びたくないなら、戦う準備をしろ。平和ボケから目を覚ませ。女も子供も、さあ、武器を取れ！」——というものです。

今から2000年前、ちょうどイエス様が生まれた頃、イエス様の地域には、一つの「平和」が成立しました。それは「ローマの平和」と呼ばれました。それは、「次の戦争の準備期間としての平和」をやめて「戦争がなくなる状態」を作ろう、という強い意志をもって打ち立てられた平和でした。戦争を終えて、互いに自分自身を捨てて、譲り合って、みんなで新しい自分なろう。そのことで祖先から引き継いだものが変わっていくとしても、殺し合うよりは、ずっといい。そういう考え方を、古代ローマ帝国は採用しました。それで、ローマ人はどんどん自分を変えながら、世界を平和にしていっていった。同時に、世界中の人も変えていった——「それは嫌だ、変わりたくない」という人は、容赦なく、ローマ帝国軍が皆殺しにした——そうして生まれたのが「ローマの平和=Pax Romana」というものでした。

この「Pax Romana=ローマの平和」という言葉から、もう一つ、特別な言葉を、教会が生み出しました。それが「キリストにある平和」です。古代ローマの言葉では、それをPax Christiと言いました。

さて、今までお話ししたことを、少し整理します。

平和には、二つあります。

「自分らしくあろう」と頑張ると、人は他人と衝突します。その衝突に備えて体を鍛え、武器を揃え、戦う準備をする。その準備期間としての「平和」があります。その平和は、古代ローマ帝国より以前の世界を支配していた「常識」そのものでした。

そして、そうではない「平和」を、古代ローマ帝国が築いた。それは画期的なことでした。それは「みんな、自分らしくあることを放棄する」という平和です。互いに譲り合う、という平和です。でも、それは、簡単ではありません。抵抗する人も出てきます。だから、その抵抗には、力づくで対処する。それが「ローマの平和」です。

「自分らしくあるために、戦う、その準備期間としての平和」と、「自分らしくあることを放棄して、互いに譲り合う平和」と、この二つの平和があること。これがまず、重要です。

マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。（マルコ福音書 15:47）

前者を選ばないで後者を選びましょう、と呼びかける運動が、つまり、たとえば「平和七夕」ということになります。ただし、その上で、その呼びかけを具体化する方法を考える。たとえば「平和七夕」であれば、「みんなで折り鶴を作って、平和を祈ろう」となる。でもそれが、古代ローマ帝国では、暴力を使って「平和」を具体化しようとした。ですからそれは血なまぐさいものとなりました。それで教会は、「別の道」を提示した。それが「キリストにある平和」です。

そして、その「キリストにある平和」を、一番深い次元で短く語っているのが、今日の聖書の個所でした。

今日の聖書の個所は、深い沈黙に支配されています。人が全員、相手を自分自身のように大切にする、そうした世界を実現させるために、イエス様は行動しました。それは「平和のための暴力」を拒否する行動でした。そしてそれは、十字架の無残な死に、イエス様を導きました。その死の沈黙の闇を、ひたすらじっと見つめている。それが今日の聖書の個所。この沈黙の場面に「キリストの平和」があります。

皆さんは、「沈黙の場面」を英語で何というか、ご存じでしょうか。「Silent」と言います。音のない映画のシーンを英語では「Silent」というそうです。今日の聖書の個所は「Silent」そのものです。さて、この英単語「Silent」ですが、このアルファベットを組み替えると「Listen」になります——このことを、先日、和尚様に教えて頂きました。広島原爆の日を記念して、イスラム教徒と仏教徒とキリスト教徒が話し合うイベントがありまして、そこに私も参加したのですが、そこで、 ニューヨークで活動している和尚様が、このことを教えてくださいました。

「Silent と Listen は、同じアルファベットでできている」。このことは意味深長だと、その和尚様は教えてくださいました。

その時、私は一つ、思い出しました。

岩手県の山の中、遠野市宮守町達曽部に住む、ある御婆さんが 20 年以上前にしてくださったお話です。そのお婆さんは、佐々木トモさん、という方です。トモさんは、昔から伝わる民話をたくさん覚えておられる方でした。トモさんは、本当に物静かな方で、山の中で黙って暮らしておられる。仙台に住むある方が、このトモさんを何度も訪ねて、 どうにか大切な古い民話を教えてもらったそうです。何度も通っている中で、その貴重な民話を本にしようということになった。そのことをお伝えしに行ったら、やっぱり黙っておられる。それで、帰ろうとしたとき、そのトモさんが、引き留めてくださって、胸に手を当てて、「ここにもうひとつあんのす」とおっしゃる。そんなことは、これまでなかったことでした。驚いて、「教えてください」と言うと、こんな歌のような物語を語られたそうです。

【おずさんと お婆さんの まりづき】

（おじさんとお婆さんの毬つき）

むがしあったぞんなす

（昔、こんなことがありました。）

ざこつりな男 魚釣りさいったけんぞん

（魚釣りをする男が、釣りに行った。）

ずーっと行くが行くが 川のほどりに家あったったから

（ずっと歩いて行くと、川辺に一軒の家があった。それで）

あえーこげなところに一戸あるって 接ってみたっけぞん

（「あれ、こんな所に一軒だけ家があるぞ」と寄ってみた。）

そすたれば なかにおずさんとお婆さんといて

（そうしたら、家の中にはおじさんとお婆さんがいて）

ふたりして茶の間で毬ついてあったんだと

（二人で茶の場で毬ついていたんだそう。）

むけー山のしばぐるみ

(向こうの山のシバグルミ)

うんでこぼれて拾われて

(実って 落ちて 拾われて)

売られて買われて食べられたあ

(売られて 買われて 食べられた)

ああ すっぱんすっぱんすっぱんすっぱん

って二人して毬ついてあそんであったけぞん

(・・・と、二人で毬つきして遊んでいた。)

一所懸命にまりついてあったけ

(一所懸命に毬つきしていたもんだから)

おずさんが力入れたから

(おじさんが力を入れすぎてしまって)

その毬 えんこの向けさ上がったぞんやー

(その毬は縁側の向こうへ飛んでいってしまった。)

ああ 毬 えんこの向けさ上がって行ったから

(毬が縁側の向こうへ飛んで行ってしまったから)

お昼にすんべって おずさんとおばさん

(「お昼ご飯にしよう」と、おじいさんとおばあさんは)

お昼食べて そして寝てしまったけぞん

(昼食を摂って、そのまま昼寝してしまった。)

そのうちに 雑魚釣り男あその毬持って行ってしまったんだと

(その隙に、魚釣りの男は、その毬を盗んで行ってしまったそう。)

そすて 隣村さ行って

(そして、隣村に行って)

むけー山のしばぐるみ

(向こうの山のシバグルミ)

うんでこぼれて拾われて

(実って 落ちて 拾われて)

売られて買われて食べられたあ

(売られて 買われて 食べられた)

ああ すっぱんすっぱんすっぱんすっぱん

って毬ついて お金もらって歩いたったぞんやあ——どんとはれ」

マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。（マルコ福音書 15:47）

と、こんな話だそうです。

この佐々木トモさんがお分かち下さった民話の意味は、おおよそ、こうです。

しばぐるみ というのは、山の木に実るクルミの事です、それは、実は、売られて行く子どもたちのことを意味しています。この佐々木トモさんは、だれも友達がいないのだそうです。子どもころの友だちは、みんな、家族が食べていくために、遠くへ売られていった。

その頃、村役場には「娘身売り相談窓口」という看板が出ていた。今から 100 年くらい前の、日本の風景です。

トモさんは、体が弱くて、売り物にならなかった、ずっとこの土地に住んでいた。そのうち、子どもの時の友達はみんないなくなった。そして時間がたち、もう、そんなことは皆、忘れてしまった。

でも、民話の中に、その悲しさが残された。「しばぐるみ」を子どもたちに例えて、

むけー山のしばぐるみ

うんでこぼれて拾われて

売られて買われて食べられたあ

ああ すっぽんすっぽんすっぽんすっぽん

と、小さな歌が残された。そして、

その歌と毬を盗んでいったよそ者が、

子どもたちを売って回ってお金儲けをした。

そうして、私たちの今の世界が作られた。

—そんな、切なく悲しく辛い出来事のあったことを語る民話を、佐々木トモさんは、沈黙の中から語ってくださったのでした。

この民話は、沈黙の中にしっかり残されて、切なく悲しい現実のあったことを、私たちに伝える。この世界は本当はどうなっているのか、私たちの世界はどうやって作られたのか、沈黙の中に残された民話が、私たちに今、大切なことを教えてくれる。

沈黙の場面「Silent」の中に、聞くべきこと「Listen」が、確かに、秘められている。私たちの生きているこの世界の、その足元を一度むくと、そこには悲劇が眠っています。

それは沈黙の中に眠っている。その沈黙に、 私たちも心を合わせて静まってみる。そうすると、何かが聞こえてくる。

その聞こえる何かの中に、「戦争の準備期間としての平和」ではない平和への道がある。「暴力によって無理やり譲り合わされ 摺り合わされる平和」ではない平和への道がある。つまり、「キリストにある平和」への道がある。

今日の聖書の箇所は、まさにそうしたことを私たちに教える場面なのだと思います。

お祈りをしましょう。